

# あいさつに関する調査からみたネパール人ポーターと 外国人トレッカーの親しみやすさの違いについて

渡辺 恒二\*

## I. はじめに

世界最高峰であるエベレスト山をかかるネパール東部のサガルマタ国立公園では、近年、外国人トレッカーの数が急増している。彼らは、8,000m級のヒマラヤの山々の自然を求め、かつ異文化との接触を求めて、この地域にやってくる。とくに欧米人トレッカーにとっては、伝統的なシェルパ社会や<sup>1)</sup>、親しみやすいとされているシェルパとの交わりが、トレッキングの時の大きな期待のひとつになっている(たとえば Kohli, 1990)。しかしそのいっぽうで、ネパール・ヒマラヤでは、急速に開発が進み、山岳住民の伝統的な生活形態も急速に変化している。ヤクの移牧と自給農業にた

よっていた彼らは、観光業へと職業をかえ(月原・古川, 1991; Brower, 1991), トレッキングルート沿いに多くのホテル(山小屋)を開くようになった。標高3,440mのナムチェバザールの店先には缶詰やチョコレートが並び(写真1), ホテルではピザやケーキ、コーヒーを注文することができる。またエベレストベースキャンプに近いロブチ(標高4,930m)をはじめ、いたるところでビールやコカコーラを入手することもできる。このような変化は、ネパール人が外国人トレッカーと接触することによって生じた変化の代表例であり、これまでも研究者の注目を集めてきた(たとえば Fisher, 1988; Brower, 1991)。



写真1 ナムチェバザールの店頭で外国人トレッカー用に販売されている缶詰、チョコレートなどの商品

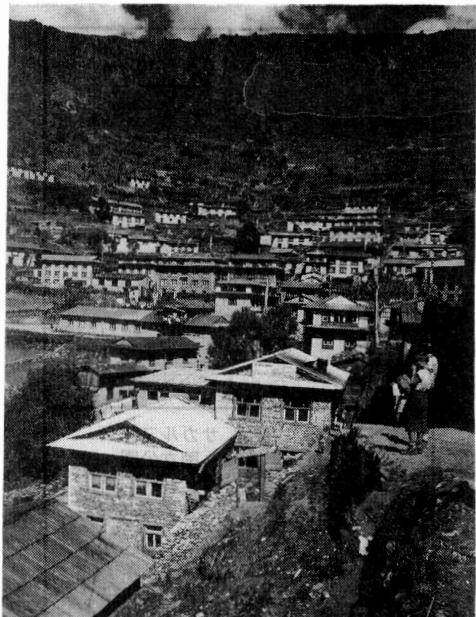


写真2 ナムチェバザールの集落と外国人トレッカー

\* 北海道大学地球環境科学研究所

ヒマラヤ最大のトレッキング地域であるサガルマータ（エベレスト山）国立公園において、もっとも頻繁に外国人トレッカーと接触をしているのは、ホテル（山小屋）従業員やポーターたちである。したがってこの地域のホテル従業員やポーターたちは、外国人トレッカーの影響をもっとも強く受け、あいさつの仕方などの点で、内面的にも変化している可能性がある。しかしながら、従来、このように外国人トレッカーの影響を強く受けた地域で、ネパール人ポーターたちのあいさつの仕方や親しみやすさといった内面的な変化を扱った研究はなかった。そこで本研究では、ヒマラヤの中でもっとも開発が進んでいるサガルマータ（エベレスト山）国立公園で、ネパール人ポーターの親しみやすさが外国人トレッckerとのそれとどれだけ異なるのか、あるいは類似しているのかを明らかにすることを目的とし、あいさつの有無の割合に関する調査を行ったので報告する。

## II. 調査地域

サガルマータ（エベレスト山）国立公園は、ネ

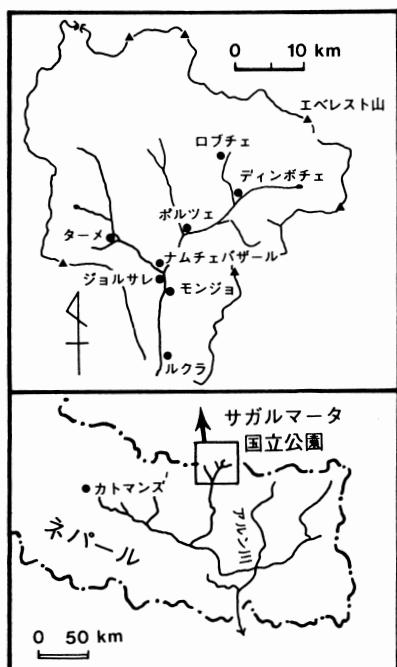


図1 調査地域位置図

データ収集地点の最低高度は2,840m（ヨルサレ付近）で、最高高度は5,100m（ロブチ北方）であった。

パールの東部に位置する、面積1,113km<sup>2</sup>の広大な山岳公園である（図1）。数多くの高峰と氷河、U字谷がこの地域の自然景観を特徴づけている（Higuchi ed., 1976, 1977, 1978, 1980）。

図1に示したように、公園内にはいくつかの集落が散在している。これらの集落間の移動は、すべて徒歩によって行われている。この地域最大の集落であるナムチエバザールには、銀行や郵便局、警察署、公園管理事務所、学校、ホテル、一般住宅がある（写真2）。1982年に公園内に居住していたシェルバは3,108人と推定されており（Pawson et al., 1984），最近の調査ではナムチエバザールの総世帯数は104であった（月原, 1990）。

公園内では、農業とヤクの移牧が伝統的に重要な経済的役割を担ってきた（Brower, 1988, 1991）。しかし現在では、多くのヤクが外国人トレッckerの荷物の運搬用に使われている。

## III. ネパール人ポーター数の推定

1970年代までにサガルマータ（エベレスト山）国立公園を訪れた外国人トレッcker数は、Garratt（1979）と Bjønness（1980）によって報告されている。また、Bjønness（1980）は、1978年の調査で、外国人トレッckerとネパール人ポーターの数の比（1:1.7）を推定している。しかしその後、液体燃料の携行規則を守るトレッキンググループが増加し、現地での滞在期間が長期化し（Garratt, 1979の調査では、1978年には平均滞在期間が12日間であったのに対し、87のトレッキンググループについての筆者自身の調査では、1988-90年には18日間であった）、要求される食事や居住性の質が向上して、1人当たりの外国人トレッckerに雇われるポーター数が増加している可能性がある。したがって、外国人トレッckerとの接触によって彼らの影響を直接的に受ける可能性があるネパール人ポーターの数を推定することが重要な基礎的資料となるが、ポーター数を明らかにする前に、上述の理由から、トレッcker数とポーター数の比の推定値を更新しておく必要があろう。

トレッckerがグループ単位であるか個人単位であるかによって、必要とされるポーター数には違いが生じる。そのため、ポーター数を推定する前に、グループトレッckerと個人トレッckerの割合

を明らかにしなければならない。1989-90年にこの国立公園を訪れた外国人トレッカーの総数は、およそ11,000人であった(Hillary, 1991)。ビザを発給しているカトマンズのイミグレイションオフィスによれば、このうち7,675人がグループトレッキングの申請をしていた。したがってグループトレッキングと個人トレッキングの人数比は7:3となる。

ひとつのトレッキンググループに何人のポーター・ガイドが雇われているかを推定するために、カトマンズにあるトレッキング会社を無作為に10社選び、1989-90年の1年間に契約をしたグループトレッキングについて、各々のグループを構成する外国人トレッカー数と、カトマンズから連れていったガイド・ポーター数、現地(サガルマータ地域)で雇ったポーター数を調べた。調査は1990年の夏に行った。表1にその結果の概略を示す。

表1 1989-90年にサガルマータ(エベレスト山)国立公園を訪れたグループトレッカーとポーターの人数比(カトマンズ市内の10のトレッキング会社での調査による)

| 調査したトレッキンググループの数 | トレッキング期間(平均日数) | 外国人トレッカーネバール人ガイド数① | ネバール人ガイド数②   |
|------------------|----------------|--------------------|--------------|
| 87               | 18.0日          | 607人               | 2,347人 1:3.9 |

注) ②の数にはポーターとしてのヤクの頭数も含まれていることに注意

調査方法が統一されていないので、単純な比較には問題があるかもしれないが、上述の1978年の調査結果(Bjønness, 1980)とは異なり、外国人トレッカー1人あたりのポーターの数が増加して、その比が1:3.9になっていることがわかる。

また、カトマンズのトレッキング会社で、1989-90年にサガルマータ(エベレスト山)およびランタン国立公園を訪れた個人トレッckerのうち150人について、ポーターとの契約状況を調べた。その結果20%の個人トレッckerが1人のポーター兼ガイドを雇っており、80%がポーターやガイドを伴わずに登山していた。したがって、個人トレッckerとポーターの比は1:0.1となる。

以上の調査結果から、1989-90年にサガルマータ(エベレスト山)国立公園を訪れたグループトレッckerに伴うポーター・ガイド数は約29,900人、個人トレッckerに伴うポーター・ガイド数は約300

人であったと推定され、1989-90年には、3万人以上のネバール人ポーター・ガイドが外国人トレッckerと行動を共にしたことが明らかになった。図2には、1973年以降の外国人トレッckerの総数の変化と、トレッcker数から推定したポーター・ガイド数の変化を示した。この図から、外国人トレッckerとの接触の増加によって、ネバール人ポーター・ガイドが外国人トレッckerの影響を受ける機会が、年々増加していることがわかる。

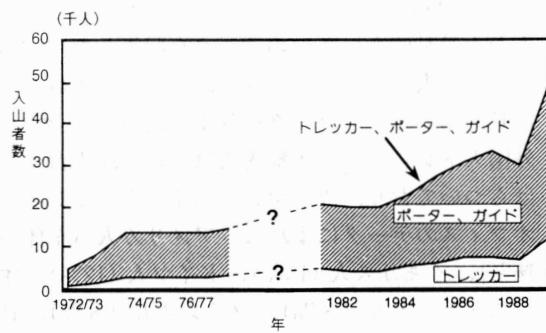


図2 サガルマータ(エベレスト山)国立公園を訪れた外国人トレッcker数とネバール人ポーターおよびガイドの推定数

トレッcker数のデータは、国立公園管理事務所およびカトマンズのイミグレイションオフィスで入手した。ポーター・ガイドの数の推定については本文を参照のこと。

#### IV. ネバール人ポーターおよび外国人トレッckerの親しみやすさ

##### 1. 調査方法

トレッキング地域でのネバール人ポーターと外国人トレッckerの親しみやすさの違いは、ホテル(山小屋)や店先での対話をはじめとして、さまざまな状況から判断される。しかし、データ収集のしやすさと比較のための統一性をはかる必要性から、本研究では、登山道でのすれちがい時に行われる、簡単なあいさつの有無に着目した。知らない者同士であっても「こんにちわ」のひとことをかけあうこの種のあいさつは、日本国内をはじめ世界の多くの山域において広く認められる。ネバール・ヒマラヤにおけるこのあいさつは、英語の「ハロー」あるいはネバール語の「ナマステ」によって行われることが多い。

データ収集の具体的な方法は、登山道を歩いている時に筆者がすれちがったネバール人ポーターおよび外国人トレッckerが、筆者にあいさつをし

てくれるかどうかを記録することである。これは、彼らが自発的に相手との接触を求めるようとしているかどうかを示すデータと考えられ、本研究ではこの形態のあいさつを能動的あいさつと呼ぶことにする。また、こちらから先にあいさつをし、相手が返答をするか否かについても調査を行った。本研究では、この形態のあいさつを受動的あいさつと呼び、能動的あいさつと区別することにした。

データは、合計475人のネパール人ポーター（そのうち、296人から能動的あいさつのデータを、179人から受動的あいさつのデータを収集した）と324人の外国人トレッカー（うち、ちょうど半数から能動的あいさつのデータを収集した）から集めた。外国人トレッカーの年齢構成は、10～50才台までばらついており、カトマンズのイミグレイションオフィスのデータによれば、アメリカ人（全体の16%）、イギリス人（15%）、ドイツ人（12%）、オーストラリア人（8%）、フランス人（8%）、日本人（8%）などからなっている（HMG, Nepal, 1990）。

データ収集は、1989年10月17日～12月5日の間に、公園内の主要なトレッキングルート沿いで行った。

## 2. 結果

図3に、能動的あいさつおよび受動的あいさつの有無を男女別に人数割合で示した。能動的あいさつ（A）、すなわち相手からの自発的なあいさつ

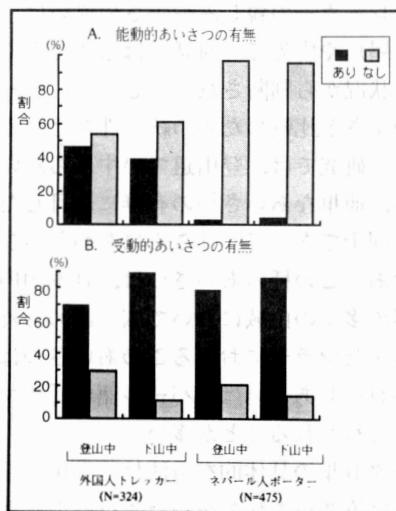


図3 サガルマタ（エベレスト山）国立公園内で1989年に調査したあいさつの有無の男女別割合

の有無に注目すると、ほとんどのネパール人（男性で96%，女性で99%）があいさつしないことがわかる。いっぽう、外国人トレッckerのうち、33%の男性が、また57%の女性が、能動的あいさつを行った。外国人トレッcker全体では、43%の人が能動的あいさつをしたのに対して、ネパール人ポーターの場合は、わずかに3%の人が能動的あいさつをしたにすぎなかった。

これに対して、こちらが先にあいさつをして返答を待つ、受動的あいさつでは、外国人トレッckerの場合もネパール人ポーターの場合も、能動的あいさつに比べて、あいさつをする人の割合が増加している（図3-B）。とくに増加率はネパール人ポーターの間で大きい。

また、能動的あいさつと受動的あいさつの両者を平均すると、外国人トレッckerよりネパール人ポーターの方があいさつしないことがわかる（表2）。このことは、 $\chi^2$ 検定 ( $\alpha=0.01$ ) によって支持される。したがって、あいさつ好きな外国人トレッckerにとっては、ネパール人ポーターたちは必ずしも親しみやすいとはいえないことになる。

さらに図3は、ネパール人女性の31%が受動的あいさつを拒否しており、99%が能動的あいさつを拒否していることを示している。この両者の平均値（形態によらずともかくあいさつを拒否するネパール人女性の場合）は、77%に達する（表2）。

表2 形態（能動的あるいは受動的）によらない全あいさつの有無

| あいさつ  | 外国人トレッcker |    |    |    |     |     |
|-------|------------|----|----|----|-----|-----|
|       | 男          |    | 女  |    | 計   |     |
|       | 有          | 無  | 有  | 無  | 有   | 無   |
| 人数    | 124        | 86 | 80 | 34 | 204 | 120 |
| 割合(%) | 59         | 41 | 70 | 30 | 63  | 37  |

| あいさつ  | ネパール人ポーター |     |    |    |     |     |
|-------|-----------|-----|----|----|-----|-----|
|       | 男         |     | 女  |    | 計   |     |
|       | 有         | 無   | 有  | 無  | 有   | 無   |
| 人数    | 134       | 226 | 26 | 89 | 160 | 315 |
| 割合(%) | 37        | 63  | 23 | 77 | 34  | 66  |

すなわち4人に3人以上の割合のネパール人女性が、あいさつをせずに、無言のまま通り過ぎていくことになる。この結果は、外国人トレッカーでは男性よりも女性の方が一般に積極的にあいさつをするのと対照的である。

ところで、荷物重量が大きいと呼吸がたいへんになるので、あいさつがつらくなる。とくにネパール・ヒマラヤのトレッキングの場合には、この要因について考えてみる必要がある。ひとりのポーターが30kgの荷物を背負うのに対して、外国人トレッカーは、あまり重たい荷物を持たないのである。この影響を明らかにするために、図4を作成した。もし登山時の荷物がポーターのあいさつ率の低下につながっているとすれば、下山時にはあいさつ率が向上するはずである。

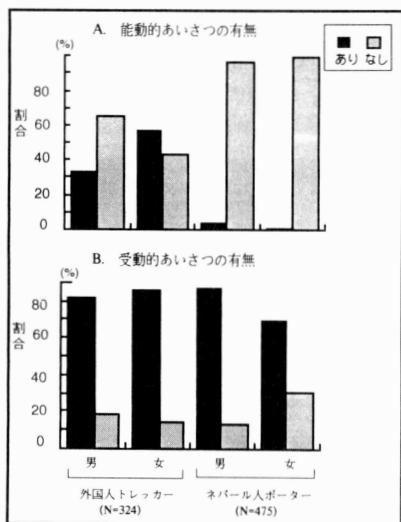


図4 サガルマータ(エベレスト山)国立公園内で1989年に調査したあいさつの有無の登山時と下山時の割合

能動的あいさつの場合(図4-A)は、 $\chi^2$ 検定( $\alpha=0.01$ )の結果、登山時と下山時とであいさつの割合に影響が生じていないことが確かめられた。

これに対して受動的あいさつの場合(図4-B)は、ネパール人ポーター、外国人トレッカーとともに、 $\chi^2$ 検定( $\alpha=0.01$ )の結果、登山中と下山中であいさつの割合に影響が生じることがわかった。すなわち下山時には登山時よりも受動的あいさつをする割合が上昇しているのである。しかし、外国人トレッカーの場合は下山時だけでなく登山時

にも重たい荷物を背負っていないのだから、下山時のあいさつの割合の向上は、荷物の有無だけでは説明できない。

このように外国人トレッカーとネパール人ポーターを比較すると、登山時と下山時のあいさつ率は同じように変化する傾向にあり、ポーターのあいさつ率だけが重たい荷物のために低下しているのではないと結論づけられる。能動的あいさつの割合が登山時および下山時のいずれでもネパール人ポーターの方で著しく低いことは、荷物のためではなく、ネパール人と外国人の異なった特質によるものと結論できよう。

これらの結果から、ネパール人ポーターの能動的あいさつの低さは、彼らに特徴的なもので、とくに女性ポーターでは受動的あいさつにおいても返答の割合が低いことが特徴的であることがわかった。

## V. まとめ

本研究では、サガルマータ(エベレスト山)国立公園において、あいさつの有無の割合を調査することによって、外国人トレッカーと、人種や言語、習慣を異にする山岳ネパール人との、親しみやすさがどう違っているのかについての考察を行った。本論での親しみやすさは、あいさつの有無のみを指標としているため、今後は、他の側面から考察を行う必要がある。しかしながら、近年の外国人トレッカーニュースの増加に伴いネパール人ポーター数も著しく増加しており(図2)、ネパール人との接触の機会が多くなってきているという点では、外国人トレッカーにとっては、すれちがい時のあいさつの意味はきわめて大きいと思われる。

調査の結果、ネパール人ポーターのあいさつの割合は、能動的にも受動的にも低く、外国人トレッカーにとってはネパール人が親しみやすいとはいいがたいことがわかった。しかし、この結果が、逆に、外国人トレッカーとの接觸が最も多いサガルマータ(エベレスト山)国立公園において得られたことを強調しておきたい。このような地域であっても、いまだにネパール人が外国人とは明白に異なる対応を示しているのである。ネパール人ポーターのあいさつが少ないことをよくないと考えるかどうかは、個人の判断による問題である。

しかし、異質性を尊重する立場からは、ネパール人のあいさつ率の低さをポジティブに評価すべきであるのかもしれない。

#### 注

1) 厳密にはシェルバを含むすべての山岳住民の社会。サガルマータ（エベレスト山）国立公園の場合、チベット系のシェルバとその近縁部族、チベット人、ネパリなどが社会を構成している（古川、1991）。

#### 謝 辞

資料の入手に協力をいただいた、名古屋大（JICA）の門田勤さんと図の作成を手伝っていただいた北大・地環研の渡辺葉紀さんに感謝します。

#### 文 献

月原敏博（1990）：観光・交易の村における農耕と牧畜－ナムチエ村研究ノートから。ヒマラヤ学誌、1, 85-112。  
月原敏博・古川彰（1991）：クンブ、ティンリー両地方の生業空間編成－家畜種構成からみた伝統と変容－。ヒマラヤ学誌、2, 169-209。

古川彰（1991）：サガルマータ国立公園の成立と住民の環境問題－ヒマラヤ高地住民の環境認識研究ノート。ヒマラヤ学誌、2, 221-227。

Bjønnes, I.-M. (1980) : Ecological conflicts and economic dependency on tourist trekking in Sagarmatha (Mt.Everest) National Park, Nepal. An alternative approach to park planning. *Norsk Geografisk Tidsskrift*, 34, 119-138.

Brower, B. (1988) : Range conservation and Sherpa livestock management in Khumbu, Nepal. *Mountain Res. Dev.*, 10, 34-42.

.... (1991) : *Sherpa of Khumbu: People, Livestock, and Landscape*. Oxford Univ. Press, Delhi, 202p.

Fisher, J.F. (1990) : *Sherpas. Reflections on Change in Himalayan Nepal*. Univ. of California Press, Berkeley, 205p.

Garratt, K.J. (1979) : Sagarmatha National Park Management Plan. His Majesty of Government of Nepal and New Zealand Cooperation Project, Kathmandu, 63p.

Higuchi, K., ed. (1976) : Glaciers and Climates of Nepal Himalayas. Part 1. *Seppyo*, 38, Special Issue, 130p.

... (1977) : Glaciers and Climates of Nepal Himalayas. Part 2. *Seppyo*, 39, Special Issue, 67p.

... (1978) : Glaciers and Climates of Nepal Himalayas. Part 3. *Seppyo*, 40, Special Issue, 84p.

... (1980) : Glaciers and Climates of Nepal Himalayas.

Part 4. *Seppyo*, 41, Special Issue, 111p.

Hillary, Sir Edmund (1991) : Aural presentation at the 1991 Tokyo Mountain Conference on 9/10 Nov. 1991. Himalayan Adventure Trust, Japan. Report of the International Symposium, Environ. Protection for the Mountains. Himalayan Adventure Trust, Japan, 119.

HMG (His Majesty's Government), Nepal (1990) : Nepal Tourism Statistics 1990. Ministry of Tourism, Dept. of Tourism, Kathmandu.

Kohli, M.S., Capt. (1990) : Review on Himalayan tourism. *Kathmandu Review*, 10 (4), 6-7.

Pawson, I.G., Stanford, D.D., Adams, V.A., and Nurbu, M. (1984) : Growth of tourism in Nepal's Everest region: impact on the physical environment and structure of human settlements. *Mountain Res. Dev.*, 4, 237-246.